

「震災・まちのアーカイブ」の活動から

佐々木 和子

神戸市の片隅に、「震災・まちのアーカイブ」という小さなボランティアグループがある。設立は、1998年3月。1995年1月に起こった阪神・淡路大震災を機に、ボランティア自らが自分たちの活動の資料を残そうと設立した「震災・活動記録室」の活動を引き継いだグループである。

設立趣旨では、「資料を残すことを通じて、震災の記録を後世に伝える活動に取り組む」と宣言。「記録を残すことは、遠回りしているけれども、震災の引き起こした問題を根もとの部分で考える確実な方法」とした。さらに、アーカイブとは、「被災した一人ひとりが、自らの記憶をたどりながら、さまざまな記録を検討する場所」。行政や学者・研究者だけが利用するのではなく、震災を体験した被災者自身が残していこうという場として、「震災・まちのアーカイブ」を開設した。

「震災・まちのアーカイブ」は、青年や主婦たちによって始まった手弁当の草の根のグループである。常に暮らしの場からの視点をもっていた。ここでは、記録だけでなく、記録からこぼれ落ちていく少数者の声に耳を傾けよう。「本当はこうだったんじゃないか」、「外ではなかなか言えないことなんだけど」というような「つぶやき」でしか表現できない声を拾い集めたいと考えてきた。被災マンションの建て替えをめぐる、補修の可能性を探り、異議を唱えてきた人たちの資料に関心を寄せてきたのは、そういった考えに基づく。

アーカイブ構築を考えると、日々生まれる膨大な記録(資料)の何を残すのか選ぶ視点が重要となってくる。記録が無いこと、残らないことは、いずれすべてが無かったことになる。これまで、多くの女性が社会の中で新しい地平を求めて、もがき、闘ってきた。また、災害でより被害を受けるのは女性や高齢者、子どもである。それらの痕跡を「無かったこと」にしないためにも、各地域で女性たちの手によるアーカイブ構築が充実することを期待している。



PROFILE

ささきかずこ：震災・まちのアーカイブ会員、神戸大学地域連携推進室特命准教授。1996年から2002年まで、囑託として兵庫県による阪神・淡路大震災の震災資料収集事業を担当。震災の記録と記憶を考えるボランティアグループ、震災・まちのアーカイブの1998年設立初期からの会員。現在、神戸大学で、災害資料の保存・活用についての研究を行っている。